

## いじめ被害経験を有する学生のレジリエンス資源～ 両親との関係に焦点を当てて～

著者	米田 龍大, 志渡 晃一, 大友 芳恵
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部学会誌
巻	16
号	1
ページ	29-33
発行年	2020-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00064848/">http://id.nii.ac.jp/1145/00064848/</a>

## 【研究報告】

# いじめ被害経験を有する学生のレジリエンス資源～両親との関係に焦点を当てて～

米田 龍大<sup>1)</sup>, 志渡 晃一<sup>2)</sup>, 大友 芳恵<sup>2)</sup>

1) 北海道医療大学大学院 看護福祉学研究科 博士後期課程

2) 北海道医療大学大学院 看護福祉学研究科

## 要旨

本研究の目的はいじめ被害経験を有する学生のレジリエンス資源に関する示唆を得ることである。そのために、学生と最も身近な環境資源である両親との関連に焦点を当て、いじめ被害経験のない学生といじめ被害経験のある学生について比較検討した。2018年4月～9月に道内12の高等教育機関に所属する学生2,693名を調査し、2,260名(87.6%)から有効回答を得た。いじめ被害経験のある学生は334名(14.8%)であった。いじめ被害経験の有無による層化後、目的変数を抑うつ症状(CES-D)、説明変数を父親・母親との関係各10項目として関連を検討した。多変量解析の結果、母子関係について、いじめ被害経験のない者と対比して、いじめ被害経験のある者で特徴的な関連要因は見られなかった。一方、父子関係との関連ではいじめ被害経験がある者の特徴として、過干渉ではないこと、過保護ではないこととの関連がみられた。

## キーワード

大学生, いじめ被害経験, レジリエンス (Resilience), CES-D, 横断研究

## I. 緒言

逆境状態に遭ったにも関わらずその後回復し、適応的な状態に至ったものを説明する概念の一つに「レジリエンス (Resilience)」がある。レジリエンス概念の中核は、逆境に遭遇すること、逆境状態にあったにもかかわらずその後、適応的な状態を示すことである(秋山, 2019; 平野, 2016)。レジリエンスの発揮には個人の心理的要因だけでなく、環境資源と個人特性の相互作用が必要だといわれている(Fraser, 2004; 仁平, 2014)。しかし、これまで本邦で行われているレジリエンス研究は心理的特徴などに焦点を当てた個人要因に関する検討が中心であり、対人関係などを含む環境要因などとの関係は十分に検討されていない。なお、レジリエンスの促進要因や保護要因は総称してレジリエンス資源と呼ばれている(秋山, 2019; Olsson・Bond・Burns・Vall-Brodrick・Sawyer, 2003)。

本研究では、わが国において誰もが経験する可能性の高い逆境状態として「いじめ」に焦点を当てる。平成30年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(文部科学省, 2019)では認知されたいじめの件数が54万件を超え、過去最高値を記録した。いじめは短期的、長期的に心身の健康を阻害する可能性が報告されている。水谷・雨宮(2015)

は小中学校時代のいじめ被害経験が自尊感情の低下を通じ、大学生時点の幸福度を低下させる可能性を示唆している。荒木(2005)は、いじめ被害体験者が青年期後期において対人的ストレスイベントを多く体験しているわけではないにもかかわらず、非被害体験者よりも不安や抑うつ傾向にあることを示している。

いじめ被害は誰もが経験する可能性があり、これまで積極的に行われている一次予防的対策に加え、その回復策を検討することは後の健康で有意義な生活の実現に向けて重要だと考えられる。しかし、いじめ被害経験を有する学生のレジリエンス資源について対人関係等に焦点を当てた研究は十分に行われていない。そこで本研究はいじめ被害経験のない学生といじめ被害経験のある学生の比較から、いじめ被害経験を有する学生のレジリエンス資源に関する示唆を得ることを目的として、学生と最も身近な環境資源である両親との関連について検討する。

## II. 方法

### 1. 調査期間・対象・実査方法

2018年4月から9月に北海道内にある12の高等教育機関に所属する学生2,693名を対象に無記名自記式質問紙票を用いた集合調査を行った。

### 2. 調査項目

調査項目は、1) 性・年齢, 2) いじめ被害経験の有無1項目, 3) 米国国立精神保健研究所開発疫学的うつ病評価尺度(以下:CES-D)日本語版20項目, 4)

## <連絡先>

米田 龍大

北海道医療大学大学院 看護福祉学研究科 博士後期課程

E-mail: hagnosis\_mari@yahoo.co.jp

父親との関係に関する10項目、5)母親との関係に関する10項目とした。

### 3. 集計・分類・分析方法

回収した質問紙票をもとにデータセットを作成した(Microsoft Excelを使用)。質問紙票の回収数は2,580名分(95.8%)であり、回答に欠損があった者を除いた有効回答数は2,260名分(87.6%)であった。

CES-D 日本語版は抑うつ傾向のスクリーニング尺度であり、20項目4件法で質問し、既定の方法にて合計点を算出した。合計点は0点から60点の範囲に分布し、高得点であるほど抑うつである。先行研究(米田・児玉・安藤・小川・木口・志渡, 2019; 島・鹿野・北村・浅井, 1985)を参考に16点以上を「高うつ群」、16点未満を「低うつ群」とした。レジリエンス研究では逆境と回復の定義が必要であり(庄司, 2009)、先行研究(荒木, 2005; 坂西, 1995)に倣い、いじめ被害経験を有する対象者を「高うつ群」と「低うつ群」に分類し、いじめ被害経験があるにもかかわらず、現在低うつ群に該当する者をレジリエンスが発揮されている状態とした。

父親との関係および母親との関係は、それぞれ10項目を質問し、該当するものを選択してもらった。

### 4. 解析方法

解析にあたり、目的変数をCES-D、他の変数を説明変数とした。単変量解析としてFisherの正確確率検定、多変量解析としてロジスティック回帰分析(ステップワイズ法)を行った。

### 5. 倫理的配慮

調査対象となる学生に対し、1)公表に当たり、結果は統計的処理を行い、個人が特定されることはないこと、2)得られたデータは研究以外の目的での使用

はしないこと、3)調査への参加・不参加により不利益を被ることはないこと等を書面及び口頭で十分に説明し、調査紙票の提出をもって同意したものとみなした。北海道医療大学看護福祉学部・看護福祉学研究科倫理委員会の承認を得て行った(承認番号:17N024024)。

## III. 結果

### 1. 基本属性

いじめ被害経験あり該当者は334名(14.8%)であった。平均年齢±標準偏差(以下;SD)はいじめ被害経験あり20.1±2.7歳、いじめ被害経験なし19.5±1.9歳であった。低うつ群該当率は、いじめ被害経験ありの内117名(35.0%)、いじめ被害経験なしの内1,077名(55.9%)が低うつ群に該当していた。

### 2. CES-Dと母子関係の関連

表1にいじめ被害経験別のCES-Dと母子関係との関連を示した。単変量解析の結果、いじめ被害経験ありをみると、高うつ群と比較し低うつ群で有意に該当率が高かった項目は「1.自分との関係が良かった」「10.過干渉ではなかった」の2項目であった。いじめ被害経験なしについて、高うつ群と比較し低うつ群で該当率の高かった項目は「1.自分との関係が良かった」「2.何でも話すことができた」「9.過保護ではなかった」「10.過干渉ではなかった」の4項目であり、低うつ群で該当率の低かった項目は「3.しつけが厳しかった」「6.学校の成績を重視していた」「8.虐待を受けた」の3項目であった。

表2にいじめ被害経験別のCES-Dと母子関係との関連について多変量解析を行った結果を示した。いじめ被害経験ありで有意な関連が認められたのは「10.過干渉ではなかった」の1項目であり、過干渉であった場合と比べ過干渉ではない場合の低うつ群オッズ比(以下;OR)は2.3(95%CI:1.3-4.0)であった。い

表1. いじめ被害経験別にみたCES-Dと母子関係との関連

	いじめ被害経験 あり		p	いじめ被害経験 なし		p	n (%)
	低うつ群	高うつ群		低うつ群	高うつ群		
	117(100.0)	217(100.0)		1077(100.0)	849(100.0)		
1 自分との関係がよかった	103(88.0)	170(78.3)	0.04	1006(93.4)	756(89.0)	<0.01	
2 何でも話すことができた	75(64.1)	115(53.0)	0.06	669(62.1)	422(49.7)	<0.01	
3 しつけが厳しかった	20(17.1)	49(22.6)	0.26	93(8.6)	122(14.4)	<0.01	
4 困ったときは親身に助言してくれた	73(62.4)	125(57.6)	0.42	623(57.8)	455(53.6)	0.07	
5 将来の職業などを決められた	7(6.0)	25(11.5)	0.12	29(2.7)	35(4.1)	0.10	
6 学校の成績を重視していた	30(25.6)	68(31.3)	0.31	178(16.5)	179(21.1)	0.01	
7 死別した	0(0.0)	5(2.3)	0.17	8(0.7)	5(0.6)	0.78	
8 虐待を受けた	3(2.6)	8(3.7)	0.75	2(0.2)	12(1.4)	<0.01	
9 過保護ではなかった	94(80.3)	159(73.3)	0.18	934(86.7)	689(81.2)	<0.01	
10 過干渉ではなかった	97(82.9)	147(67.7)	<0.01	1008(93.6)	735(86.6)	<0.01	

p : Fisherの正確確率検定

表2. いじめ被害経験別にみたCES-Dと母子関係との関連 (多変量解析)

	いじめ被害経験あり		いじめ被害経験なし	
	OR (下限値-上限値)	95%CI	OR (下限値-上限値)	95%CI
1 自分との関係がよかった				
2 何でも話すことが		できた/できなかった	1.5	(1.3-1.9)
3 しつけ		厳しくなかった/厳しかった	1.5	(1.1-2.0)
4 困ったときは親身に助言してくれた				
5 将来の職業などを決められた				
6 学校の成績を重視していた				
7 死別した				
8 虐待		受けていない/受けた	5.7	(1.3-26.2)
9 過保護ではなかった				
10 過干渉		ではなかった/であった	2.3	(1.3-4.0)

ロジスティック回帰分析 (ステップワイズ法, 調整変数: 性・年齢)  
OR: 曝露/基準の低うつ群の出現オッズ比.

いじめ被害経験なしで関連のみられた項目は「2. 何でも話すことができた (OR1.5, 95% CI:1.3~1.9)」「3. しつけが厳しくなかった (OR1.5, 95% CI: 1.1~2.0)」「虐待を受けていない (OR5.7, 95% CI:1.3~26.2)」「過干渉ではなかった (OR1.8, 95% CI: 1.3~2.5)」の4項目であった。

### 3. CES-Dと父子関係の関連

表3にいじめ被害経験別のCES-Dと父子関係との関連を示した。いじめ被害経験ありで高うつ群と比較し低うつ群で該当率の高かった項目は、「1. 自分との関係が良かった」「2. 何でも話すことができた」「4. 困っているときは親身に助言してくれた」「9. 過保護ではなかった」「10. 過干渉ではなかった」の5項目であった。いじめ被害経験なしをみると、低うつ群で該当率の低かった項目は、「1. 自分との関係が良かった」「2. 何でも話すことができた」「4. 困っ

ているときは親身に助言してくれた」の3項目であり、低うつ群の該当率が低かった項目は「3. しつけが厳しかった」の1項目であった。

表4にいじめ被害経験別のCES-Dと父子関係との関連について多変量解析を行った結果を示した。いじめ被害経験ありで関連の認められた項目は「2. 何でも話すことができた (OR2.1, 95% CI: 1.3-3.7)」「9. 過保護ではなかった (OR3.9, 95% CI: 1.7-9.0)」の2項目であった。いじめ被害経験なしで関連の示された項目は「1. 自分との関係が良かった (OR1.5, 95% CI: 1.1~2.2)」「2. 何でも話すことができた (OR1.5, 95% CI: 1.3~1.9)」「3. しつけが厳しくなかった (OR1.4, 95% CI:1.0~2.0)」の3項目であった。

表3. いじめ被害経験別にみたCES-Dと父子関係との関連

	いじめ被害経験 あり			いじめ被害経験 なし			n (%)
	低うつ群	高うつ群	p	低うつ群	高うつ群	p	
	117(100.0)	217(100.0)		1077(100.0)	849(100.0)		
1 自分との関係がよかった	107(91.5)	178(82.0)	0.02	1009(93.7)	759(89.4)	<0.01	
2 何でも話すことができた	36(30.8)	39(18.0)	0.01	337(31.3)	186(21.9)	<0.01	
3 しつけが厳しかった	20(17.1)	50(23.0)	0.26	82(7.6)	95(11.2)	0.01	
4 困ったときは親身に助言してくれた	45(38.5)	60(27.6)	<0.05	406(37.7)	265(31.2)	<0.01	
5 将来の職業などを決められた	5(4.3)	14(6.5)	0.47	21(1.9)	17(2.0)	1.00	
6 学校の成績を重視していた	22(18.8)	47(21.7)	0.57	101(9.4)	94(11.1)	0.22	
7 死別した	3(2.6)	9(4.1)	0.55	28(2.6)	27(3.2)	0.49	
8 虐待を受けた	2(1.7)	9(4.1)	0.34	5(0.5)	9(1.1)	0.18	
9 過保護ではなかった	110(94.0)	176(81.1)	<0.01	1001(92.9)	770(90.7)	0.08	
10 過干渉ではなかった	114(97.4)	192(88.5)	<0.01	1053(97.8)	817(96.2)	0.06	

p: Fisherの正確確率検定

表4. いじめ被害経験別にみたCES-Dと父子関係との関連 (多変量解析)

		いじめ被害経験あり		いじめ被害経験なし	
		OR (下限値-上限値)	95%CI	OR (下限値-上限値)	95%CI
1 自分との関係が	良かった/良くなかった			1.5	(1.1-2.2)
2 何でも話すことが	できた/できなかった	2.1	(1.3-3.7)	1.5	(1.3-1.9)
3 しつけ	厳しくなかった/厳しかった			1.4	(1.0-2.0)
4 困ったときは親身に助言してくれた					
5 将来の職業などを決められた					
6 学校の成績を重視していた					
7 死別した					
8 虐待を受けた					
9 過保護	ではなかった/であった	3.9	(1.7-9.0)		
10 過干渉ではなかった					

ロジスティック回帰分析 (ステップワイズ法, 調整変数: 性・年齢)  
OR: 曝露/基準の低うつ群の出現オッズ比.

#### IV. 考察

本研究はいじめ被害経験のない学生といじめ被害経験のある学生の比較から、いじめ被害経験を有する学生のリジリエンス資源に関する示唆を得ることを目的として、学生と最も身近な環境資源である両親との関連について検討を行った。

CES-Dと母子関係との関連についていじめ被害経験を有するにもかかわらず低うつ群に該当する者(以下;リジリエンス群)は総じて、自分との関係が良く、過干渉ではなかった。これは岩崎・海蔵寺(2011)を支持する結果であった。父子関係との関連をみると、リジリエンス群の特徴として自分との関係が良く、何でも話すことができ、困った時は親身に助言をしていていた。さらに過保護、過干渉ではなかった。齊藤(2016)はいじめられた際に役立った父親の関わりとして、直接的な介入によりいじめを止めてくれたことや本人の心情をくみ取り尊重した関わりをしてきたことを挙げており、これを支持する結果であった。

いじめ被害経験のない者に対比してみると、母子関係との関連ではいじめ被害経験のある者で特徴的な関連要因は見られなかった。父子関係との関連では、いじめ被害経験があるにもかかわらず低うつ群に該当する者の特徴として、過干渉や過保護ではないことと関連がみられたことは興味深い。「令和元年版 少子化社会対策白書」(内閣府, 2019)によると6歳未満の子供を持つ夫婦の家事・育児関連時間について女性が7時間34分であるのに対し、男性は1時間23分に留まっている。また「男女共同参画白書 令和元年版」(内閣府, 2019)によると「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という性別役割分担意識について男性の約4割、女性の約3割の者が賛成している状況である。一般に母親は子どもと関わる時間が長く、こうした構図が子どもの成長後も変化しているとは考えにく

い。いじめ被害経験の有無に関わらず母親と子の関わる場面が多いため、今回母子関係について特徴的な関連要因が認められなかった可能性が考えられる。父子関係について「The Importance of Fathers in the Healthy Development of Children」(Office on Child Abuse and Neglect, Children's Bureau, 2006:22)では青年期において子どもは父親から将来設計や他者との関係について助言を得ており、父親が子どもと関わるのが成長のきっかけになる可能性を示唆している。しかし、先述の通り、わが国では男性が子どもとかわる時間が短い状況にある。いじめ被害経験を有する学生のリジリエンス資源として、母親のみならず、父親の関わりについても重要である可能性が示されており、今後は両親ともに子どもとかわることのできる環境整備を行う必要があると推察する。

本研究の有効性は、いじめ被害経験がある者に特徴的なリジリエンス資源として父子関係が関連している可能性を示したことがある。限界及び課題として、横断研究であるため因果関係の推定が困難である点が挙げられる。いじめ被害経験時期やいじめ被害の重症度などについては十分に把握できておらず、今後、経験時期や重症度別に検討を行うことが課題である。さらに父親母親以外の家族関係についても含めた検討が必要であると思われる。

#### 引用文献

秋山薊二 (2019). 人のリジリエンス資源から見るソーシャルワーク. 関東学院大学人文科学研究所報, 42, 31-50.  
荒木 剛 (2005). いじめ被害体験者の青年期後期におけるリジリエンス (resilience) に寄与する要因について. パーソナリティ研究, 14, 54-68.  
坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影

- 響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差.  
社会心理学研究, 11 (2), 105-115.
- Fraser,M.W. (2004)／門永朋子, 岩間伸之, 山縣文治  
(2009). 子供のリスクとレジリエンス (初版). 33,  
株式会社ミネルヴァ書房, 京都.
- 平野真理 (2016). レジリエンス～多様な回復を尊重す  
る視点～. 広島大学大学院心理臨床教育研究セン  
ター紀要, 15, 27-30.
- 岩崎久志, 海蔵寺陽子 (2011). 過去のいじめられ経験  
からの回復過程について－自己否定感のあるクライ  
エントの事例を通して. 流通科学大学論集 人間, 社  
会, 自然編, 24, 29-39.
- 水谷聡秀, 雨宮俊彦 (2015). 小中高時代のいじめ経験  
が大学生の自尊感情とWell-Beingに与える影響. 教  
育心理学研究, 63 (2), 102-110.
- 文部科学省 (2019/ 1 /20). 平成30年度児童生徒の問題  
行動, 不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査.  
<https://www.mext.go.jp/content/1410392.pdf>,  
2019.1.10.
- 内閣府(2019/ 1 /20). 令和元年版 少子化社会対策白書.  
[https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/  
whitepaper/measures/w2019/r01pdfgaiyoh/  
pdf/01gaiyoh.pdf](https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w2019/r01pdfgaiyoh/pdf/01gaiyoh.pdf) .
- 内閣府 (2019/ 1 /20). 男女共同参画白書 令和元年.  
[http://www.gender.go.jp/about\\_danjo/whitepaper/  
r01/zentai/pdf/r01\\_genjo.pdf](http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r01/zentai/pdf/r01_genjo.pdf). 2019/1/20.
- 仁平義明 (2014). レジリエンスとは何か. 児童心理, 68  
(11), 13-20.
- Office on Child Abuse and Neglect, Children's  
Bureau (2006). The Importance of Fathers in the  
Healthy Development of Children : 22.
- Olsson,C.A., Bond,L., Burns,J.M., Valla-Brodrick,D.  
A.,Sawyer,S.M. (2003). Adolescent resilience : a  
concept analysis. Journal of Adolescence, 26, 1-11.
- 齊藤英俊 (2016). いじめ経験時の周囲の関わりといじ  
め経験の長期的影響との関連性の検討. 北陸学院大  
学, 北陸学院大学短期大学部研究紀要, (9), 23-30.
- 島 悟, 鹿野達男, 北村俊則, 浅井昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度精神医学. 精神医学, 27 (6),  
717-723.
- 庄司順一 (2009). レジリエンスについて. 人間福祉学  
研究, 2, 35-47.
- 米田龍大, 児玉壮志, 安藤陽子・小川克子・木口幸子・  
志渡晃一 (2019). 高等教育機関に所属する学生の抑  
うつ症状と首尾一貫感覚およびレジリエンスとの関  
連に関する専攻別検討. 北海道医療大学看護福祉学  
部学会誌, 15, 39-43.

受付：2019年11月30日

受理：2020年2月7日